



創立五十周年を祝う

第8代学校長 野崎 倉仁

創立五十周年を迎えられましたことにおめでとう存じます。

現在県下には県立高校が百二十余校ありますがその中で本校のように創立の喜びも束の間、戦争の激化につれて生徒の勤労働員が始まり、空襲により学校の罹災、校舎を求めて戦災の廢墟の中を転々とし、やがて敗戦、ようやく現在の地に根拠地を得て落ちつくと、学制改革、新制度の高等学校に変わり、男女共学となり、それこそ立て続けの激しい変遷と苦難を経験した学校は少ないと思います。この間の先生方、生徒諸君の御苦労は大変だったと思いますし、阪部先生（私の恩師であり上司でもありました）の御苦心は如何ばかりであったかと、旧本館の佇まいを見ては、偲ばれました。阪部先生が去られて幾年かの後、私が本校に奉職することになり、日々出勤すると壁上から先生のお顔が「どうかね、今日は？」と見おろして居られるので、不肖の弟子が師の跡を汚すことは無いのかと気持ちを引きしめたものでした。短い在職期間でしたので、その頃の思い出を書くようにとのことでしたから、着任当初の印象などを記して、お許しいただきたいと存じます。

旧本館へ入ってまず感じたのは、古くなったなあ、室内が暗いなあ、高校生の大きな身体を定員数だけ容れるのには狭すぎるなあ、コイツは早く何とかしなくてはいけないなあ、ということでした。生徒諸君はその窮屈さや暗いことを跳ね返すかのように明るく活気が溢れているようで、さすがに芦高生、環境に負けてはいないなあ、と心強く感じました。そして職員室も暗いこと、これでは先生方も困って居られるにちがいない、何とかしなくては、というのが第一印象として残って居ります。旧知の先生方にも久しぶりで親しくお話ができ、かつては元気旺盛の美青年が今や円熟した好紳士の先生をはじめ皆さん真面目な気持ちのよい先生方が揃って居られて嬉しかったことを覚えております。

びっくりさせられたのは、某日、運動場の様子を見に出て、国道に近いあたりを歩いていると、頭上の高架道路の側壁が大きな音と共に突然破れて、自動車の前部がニュッと突き出て来ました。高速度のままだったら飛び出してきた運動場へ墜落してきたかもしれない。幸いに生徒は近くには居なかったものの、若し万一勢いあまって降ってきたら……と思うと冷や汗が出ました。災難はどこに起るやら。

明るい校舎が整齊と建ちならび、すっかり面目一新の感がある本校が五十周年を機に二十一世紀へ向けて一段と芦高教育を充実発展されて行かれることを切に祈ります。